

## 日本海海戦一〇九周年記念式典式辞

本日ここに、若宮防衛大臣政務官、武居横須賀地方総監、鮎田自衛艦隊司令官、コールマン在日米海軍司令部参謀長をはじめ、多数のご来賓のご臨席を賜り、日本海海戦一〇九周年記念式典を挙行できますことは、真に喜びに耐えません。

皆様ご承知のとおり、十八世紀の産業革命以来、列強は強大な軍事力を背景に植民地を求め世界に進出致しました。

十九世紀になると東南アジアに矛先を向け、アヘン戦争に敗れた清国からは租借地などを獲得しました。当時の列強が支配した植民地は実に世界の約八割強であり、まさにこの弱肉強食の時代に、日本という「まことに小さな国が、明治と言う開化期を迎えた」ことになります。

ロシアは、北東アジア地域に版図（はんと）を広げ、義和団の乱に乗じて満州に大軍を駐留させるのみならず朝鮮半島にも露骨な触手を伸ばしてきました。

このままでは、ロシアに朝鮮半島を支配され、日本も清国と同じ命運を辿ると危機感を抱いた日本は、我が国の主権を守るため大国ロシアと戦う決断をしたのであります。まさに自存（じそん）自衛の防衛戦争でありました。

当時の帝政ロシアは、日本の十倍の国家予算と軍事力を有する大国でしたが、我が国は、海洋国家英国と同盟を結び、国民一人一人がそれぞれの分野で死力を尽くし、大きな負担に耐え、文字どおり挙国一致で日露戦争を戦い抜きました。

軍事的にも財政的にもまさにぎりぎりの戦いでありましたが、日本陸軍は世界最強と言われたロシア陸軍と戦い、苦戦の末、旅順を落としロシア艦隊を壊滅させ、奉天会戦で勝利をおさめ、更に、明治三十八年（一九〇五年）五月二十七日 東郷司令長官率いる日本の連合艦隊は、将兵の極めて高い士気と、練りに練られた巧みな作戦・用兵でバルチック艦隊を撃滅し、世界の海戦史上例を見ない大勝利を収めたのであります。このため、ロシアにおいても、講和止む無しの機運が高まり、ルーズベルトアメリカ大統領の仲介でポーツマス講和条約が締結され、日露戦争は勝利のうちに終結いたしました。

この戦争により我が国は独立を全うするとともに、国際的地位を高めました。日本が大国ロシアに勝利したことが、抑圧されていたアジア諸国などの多くの人々に独立国家建設の気運をもたらし、その後それらの国々が独立を勝ち取ったことは歴史の示す通りであります。

まさに自衛のために戦った防衛戦争であり、「三笠」の勇姿を眺める度に、明治の人々の気概と勇気、そして国家に対する熱い思いを感じざるを得ません。

他方、我が国固有の領土である尖閣諸島への中国の無法な侵犯に耐え、北朝鮮による同胞の拉致を許し、竹島及び北方領土を未だに解決できない現状に憂慮せざるを得ません。

戦後、わが国は、平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、安全と生存を保持しよ

うと決意し、防衛を他国に委ね、急速な経済復興を成し遂げ経済大国になりました。しかし、それを可能とした環境も揺らぎ始め、日本は今やかつてない至難の時代を迎えようとしております。

昭和三十三年（一九五八年）十一月、三笠保存会設立総会において、小泉信三先生は次のような講話をされております。

『自尊自重の精神のない国民が、他国の人々の侮りを受けるのは当然であり、自らを重んずる精神のないものは、弱小のものに対しては不遜となり、強大なものに対して卑屈になることは避けがたいことであります。

他国の武力に屈するのやむなきに至った日本人は国民としての誇りを失い、心の支えを失って、退廃に陥りました。道徳的努力を無意味なものとして嘲る思想、ひたすら官能の満足を追い求める傾向、さらに、何者かに媚びる気持ちから、しきりに日本及び日本人を侮り嘲る風潮が生じております。』

五十年以上も前の話ですが、我が国の現状を見ますと、政治を始め、教育、マスコミなど小泉先生が懸念された状態が今だ続いており、日本人としての誇りも矜持もない人々が多く見られることは極めて残念であります。

この記念艦「三笠」が、今後とも国民に広く親しまれ、多くの方々、特に日本の将来を担う青少年にとって、その発奮の一助になることを願って止みません。

本日、この日本海海戦一〇九周年の記念の日に、改めて明治の先達（せんだち）の気概と勇気に思いを致すとともに邦家（ほうけ）の安寧と弥栄（いやさか）を心から祈念いたします。

最後になりましたが、平素から大変お世話になっております地元横須賀の皆様、ご指導・ご協力を賜っております官公庁・三笠保存会会員各位、また、本日の式典に多大のご尽力を頂きました横須賀地方総監部及び横須賀淡交会の皆様に対して、衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成二十六年五月二十七日

三笠保存会会長

増 田 信 行